様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ２７ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２４４０５３

研究課題名（和文）アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study of Production, Marketing and Consumption of Textile Crafts in Asia

研究代表者
中谷　文美（Nakatani, Ayami）

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：９０２８８６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　25,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本を含むアジア各地で、伝統的な手法を用い、主として手作業で製作される布工芸品（染め・織り・編みなどの技法による工芸品）を対象に、メンバー各自による個別フィールド調査のほか、グループ調査を日本国内外で実施した。各地域の生活世界の文脈に根ざした多様な素材、製作技法、製品の用途には、文化遺産をめぐる国際機関のイニシアチブや国家政策、グローバルな市場形成の下で、顕著な変化が生じつつあるが、そこには日本人仲介者及び消費者の動向も密接なつながりを持つことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research was implemented by Japanese anthropolgists, together with international co-researchers, on the process of production, marketing and consumption of traditional textiles and related crafts in Asia. In addition to individual field research in various parts of Asian region, the members conducted joint research in India, Bhutan, Okinawa, Japan and Indonesia to gain a common frame of references.
The collaborative research has revealed multifaceted changes in sites of production in terms of materials, techniques, patterns and usages end products under the influence of heritage discourse, national policies and global market trends. In particular, Japanese mediators are deeply involved with the process of revitalizing and/or promoting local textile production to cater for Japanese consumers, who exhibit specific tastes and genunine interests in handcrafted items produced by Asian artisans.The result of this four-year-research will be published as an edited volume in English.

研究分野：文化人類学

キーワード：布工芸品　文化遺産　観光　物質文化　ジェンダー　仲介者　伝統染織　アジア

１．研究開始当初の背景

文化人類学及び芸術学、美術史、地域研究などの分野で蓄積してきた民族誌的事例は、伝統的な素材や技法を用いた布製品の生産と使用が、さまざまな社会において、親族組織、カースト的集団、パトロン-クライアント関係などをはじめとする多様な社会関係に根ざすこと、そして富や社会階層、あるいは民族の象徴としての役割を果たしてきたことを明らかにしてきた。

これらの先行研究は、主として次の２つの潮流を形成している。１つは、物質文化としての布の製作技術、素材などの現状と変化、あるいは個別の色・意匠などの文化的意味を重視する流れ、もう１つは、制作者や使用者を取り巻く社会的・文化的背景に着目し、儀礼や社会集団、民族アイデンティティ、あるいはナショナリズムの展開の中に布生産を位置づけようとする流れである。この研究分野における文化人類学の貢献は、これら２つの研究動向のどちらか一方に与するのではなく、長期にわたる詳細なフィールド調査の積み重ねを通じて、技術的あるいはデザイン的側面と社会的・文化的文脈の両方を視野におさめた研究が可能になる点にある。

本研究の研究代表者及び分担者、連携研究者はいずれも、それぞれの調査対象地において長年にわたるフィールド調査を実施してきた。研究代表者はこれまで複数の共同研究に従事する中で、分担者、連携研究者との研究交流を通じ、日本を含むアジア各国間での素材や製品の流通が加速化している現実に着目した。また、伝統的な染織を用いた衣装のファッション化が急速に進行していることから、グローバルなネットワークの拡大を十分に視野に入れた、国際的な共同研究の必要性を認識するに至った。

２．研究の目的

上記の問題意識を踏まえ、調査対象をアジア地域における布工芸品（伝統的な手法を用い、主として手作業で、染め・織り・編みなどの技法により製作される工芸品）の生産、流通、消費のあり方とした。文化人類学、芸術学、地域研究を専門とする研究分担者と連携研究者が海外研究協力者とともに共同研究を行い、以下の点を明らかにすることをめざした。

（1）対象地域の生活文化や慣習に根ざした広義の布工芸品の生産組織、生産技術、用途、販売先などが、グローバル・ネットワークの進展の下で、どのように変化してきたか。

（2）食材や機械製品などとは異なる布工芸品の特質とは何か。

（3）伝統的な布工芸品のローカルな意味づけの変容とグローバルな価値志向（世界無形文化遺産、手仕事へのノスタルジアなど）との関係はどのようなものであるか。

対象地域は日本、東アジア、東南アジア、西アジア、南アジアと多岐にわたる。さらに比較対象地としてオセアニア（パプアニューギニア、オーストラリア）とマダガスカルも加えた。これらの地域で用いられる製作技法は、木版捺染、パイル織、刺繍、絣織、紋織、ろうけつ染めなど多様であり、素材や製品の用途にも、それぞれの地域の歴史的・文化的背景が色濃く反映されている。しかし同時に、これらの布工芸品は日本をはじめとする先進工業諸国において、ノスタルジックなまなざしを向けられ、「伝統の手わざ」「アジアン雑貨」として消費される対象でもある。

そこで本研究では、素材および製品の流通により多様な形で結ばれている日本とアジア諸国における布工芸品に付与される文化的・社会的な意味やその変容を、生産者と消費者の両サイドで検討することを試みた。

３．研究の方法

本共同研究の特色は、各メンバーによる個別フィールド調査の実施とグループ全体での国内外の共同調査を組み合わせた点にある。毎年度 3～4 回実施した国内研究集会では、個別調査の成果を共有すると同時に、共同調査によって得られた知見を確認し、議論を進めることを通じて、全体としての論点の共有・精緻化を図るよう努めた。つまり、共同調査と全体での議論をはさみつつ、共通の参照枠組みと各自の個別事例を重ねることで、論点を明らかにする手法を取った。また後述のように、これらの共同調査及び研究集会には、海外研究協力者、布生産の現場に仲介者としてかかわる研究協力者やゲスト講師を招聘した。

毎年度１回のペースで組織した国際学会での分科会も、成果発表の場であると同時に、この分野における国際的な研究水準を確認し、海外研究者からフィードバックを受けつつ研究を進めるための手段と位置づけた。

（1）個別フィールド調査は、各メンバーが約 2 回､1 週間～1 か月にわたって実施した。具体的な調査先・調査年度は次の通りである。

・インド（26・27 年度）
・インドネシア（26・27 年度）
・中国（26・27 年度）
・オーストラリア（26・27 年度）
・パプアニューギニア（26・28 年度）
・日本（滋賀 26・27 年度、京都 26・27・28 年度、米沢 26 年度、沖縄 27 年度）
・アゼルバイジャン（28 年度）
・マダガスカル（28 年度）
・ラオス（29 年度）

（2）グループ共同調査は、まず 26 年度に 4 名がインド、ブータンにおいて、またほぼ全員（海外研究協力者・国内研究協力者各１名を含む）が沖縄において実施した。

27 年度には、倉敷・米子において、メンバ

ー全員にゲスト講師6名を加え、ワークショップと弓浜地区での共同調査を実施した。28年度は、インドネシアのチモールにおいて、メンバー全員による共同調査を行った。
（3）国際学会での分科会組織・報告としては、以下の3件を実施した。
・International Convention of Asian Scholars（ICAS）9（アデレード、オーストラリア、2015年7月）において、研究代表者が”Mediating conversations: Culturally Valued Textiles across Japan and India”と題する分科会を組織し、メンバー6名（韓国･インドからの海外研究協力者2名を含む）が研究報告を行った。
・Association of Asian Studies in Asia（京都､2016年6月)において、”Issues of Making Heritage in East Asian Contexts”と題する分科会を海外研究協力者が組織し、研究代表者が研究報告を行った。
・International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)中間会議（オタワ、カナダ、2017年5月）において”Fashionable Tradition: Innovation and Continuity in the Production and Consumption of Handmade Textiles and Crafts”と題する分科会を、研究代表者及び分担者が組織し、メンバー5名（アメリカからの海外研究協力者1名含む）に加えて、公募による5カ国5名が研究報告を行った。
上記国際学会のいずれにおいても、研究報告者以外の参加者から多くのコメントや質問があり、本研究課題に対する一般的関心の高さや、日本人研究者がこの課題に取り組み、発信することの意義を実感した。

４．研究成果
共同調査として実施したブータン調査では、食料調達の点では自給自足経済が今なお生きている地域においても、布製作の現場は急速に自家生産・自家消費の現場を離れ、市場用の製品生産に移行しつつある現状が明らかになった。ただし、その市場はまだ生産者に近く、製品の用途も観光客向けの加工品を別にすれば、伝統的着衣の範疇にある。同時に、王室主導の開発政策の進展が、情報の流入や物流の変化を促し、女性向け収入創出活動の一環としての布生産を奨励する背景ともなっている。同様の状況は、同じく共同調査で訪れたインドネシアのチモール島西部においても観察することができた。着衣スタイルが共通であるにもかかわらず、多種多様の技法や意匠が地域ごとの独自性を生み出し、生産者・着用者の社会的アイデンティティと結びついている状況は、ブータンで得られた知見に通じる。同時に交通網の発達や広域に広がる地域アイデンティティの醸成が、個別の意匠の流通範囲を広げ、ファッション化している現状もブータンと類似していた。
共同調査においては、各メンバーが自身の調査地の状況と照らし合わせつつ、インタビューやディスカッションを行うことを課したが、例えばインドをフィールドとするメンバーは、インドにおける手仕事の価値や職人の地位の低さがアジア地域の文脈でも特異なことを再認識した。また、民俗植物学に詳しいメンバーが加わっていたことで、ワタや染料植物などの素材利用の工夫や変化に目を向ける契機ともなった。
他方、沖縄の共同調査では、海外でのフィールド調査を行うことが多いメンバーにとって、国内の染織産業の現場に触れ、キモノ消費を核とする日本の市場の特異性やその影響力を改めて確認する機会となった。歴史的経緯や生産組織の面で対照的な4つの産地であったが、全体としては「沖縄の染織」としてくくられ、その中で産地間の競合や差異化の追求がある。だがいずれも内地市場向けの着尺生産に特化しており、従来の生産・着用の文脈とは離れた布作りが行われている点で共通している。
布工芸品の生産現場（作り手）と消費者（使い手）をつなぐ仲介者の役割の重要性については、上記調査から浮かび上がったばかりでなく、倉敷・米子で開催したワークショップに博物館、古布ギャラリー、展示会、雑誌、放送メディアという多様な現場で「伝え手」「つなぎ手」となっているゲスト講師を招聘し、議論を深めることを通じて一層明らかになった。
これらの共通の成果を踏まえつつ進めた個別調査では、ユネスコなどの国際機関や国家が主導する文化遺産・文化財保護政策が及ぼす影響や、それに伴う鑑定や価値づけ、消費者のニーズを生産者に伝える仕組みのあり方も問題となった。一見「伝統」から大きく逸脱したように見える素材や製法、意匠の変化があってもなお、当事者にとっては自らの民族表象となる衣装スタイルが持続し、選択され続けている事例や、製織糸の工業製糸化が布や着衣生産に大きな影響を及ぼしている事例なども確認された。日本国内における染織工程の一部をなす中間素材や道具の継続的生産、植物素材による織布の技術伝承のあり方などをめぐる問題にも着目した。
今回の研究で対象とした調査地では、自家用と市場向けの布製作が平行して続けられている例が少なくない。他方、海外市場での商品の差別化につなげるために、改めて植物素材による染色が導入される例も増えつつある。そこには日本の消費者の嗜好が深くかかわっている場合もある。布工芸品の生産者自身や生産現場に対する消費者の関心の高さや、消費者が生産者に転換する可能性なども含め、生産者と消費者の関係性には日本社会固有の特徴が表れているといえる。
また、多くの事例を見渡すことで見えてきたのは、布それ自体が持つ特質として可塑性、劣化性、再生性などがあり、それが製品の多様性やさまざまな価値づけを可能にしてい

るということである。同時に、メディアとしての多面性がプリント製品による織物の代替にもつながっている。

最終年度である平成29年度には、成果発表の一部として国際シンポジウム Textiles and Fashion in Asian Context を京都で開催した。海外研究協力者3名を講演者及びコメンテーターとして迎え、取りまとめの議論を行った。

なお、本共同研究の成果としては、米国の出版社 Lexington Books に提出した英文論文集案が採択され、Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion として出版準備が進んでいる。この論文集には、本研究メンバーのほか、海外研究協力者や国際学会での分科会発表者など6名が加わるため、国際的な共同研究の成果となる。さらに、保研究メンバーを核とする研究会を継続し、和文論文集を編む計画も進行している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計31件）

①Sugimoto, Seiko “Handkerchiefs, Scarves, Sarees and Cotton Printed Fabrics: Japanese Traders and Producers and the Challenges of Global Markets”, Pedro Machado, Sarah Fee and Gwyn Campbell eds., *Textile Trades, Consumer Cultures, and the Material Worlds of the Indian Ocean*, Palgrave Macmillan, 査読有, 2018, 79-104.

②金谷美和、手仕事を復興すること―インド西部地震被災地の布工芸生産者、人類学研究所研究論集4、南山大学、査読無、2018、44-64.

③宮脇千絵・風戸真理、序：装いの人類学に向けて―審美性への着目から、コンタクト・ゾーン、9、査読無、2017、264-278.

④新本万里子、網袋の提げ方のジェンダー―パプアニューギニア・アベラム社会における網袋の象徴世界、アジア社会文化研究18、査読有、2017、89-112.

⑤青木恵理子、布とフェティシズム―インドネシア・東ヌサテンガラ州の絣織の考察をとおして、田中雅一（編）侵犯する身体　フェティシズム研究3、京都大学学術出版会、査読無、2017、195-220.

⑥Kubota, Sachiko, Innovation of Paintings and Its Transmission: Case Studies from Aboriginal Art in Australia”, Terashima, Hideaki and Hewlett, Barry S. eds.,*Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, Springer, 査読有, 2016, 229-234.

⑦上羽陽子、伝統染織、三尾稔・杉本良男（編）現代インド６　還流する文化と宗教、査読無、東京大学出版会、2015、214-217.

⑧宮脇千絵、花嫁が着替えるとき―モンの衣装にこめられた意味、季刊民族学、39(1)、査読無 2015、69-86.

⑨Nakatani, Ayami “Dressing Miss World with Balinese Brocades: The “Fashion-alization” and “Heritagization” of Handwoven Textiles in Indonesia,” *Textile; Journal of Cloth and Culture*, 13(1), 査読有, 2015, 30-49. (DOI: 10.2752/175183515x142 35680035700)

⑩新本万里子、「女が肩から網袋を提げる」ということ―パプアニューギニア・アベラム社会のジェンダーの変化、アジア社会文化研究16、査読有、2014、1-24.

⑪宮脇千絵、民族服饰"的品牌和流行：以云南省文山州蒙支系苗族服饰的成衣商品化为例、韓敏・末成道男（編）中国社会的家族・民族・国家的话语及其动态―东亚人类学者的理论探索（Senri Ethnological Studies)、90、査読無2014、169-185.

〔学会発表〕（計79件）

①宮脇千絵、云南苗族（蒙人）服饰的流通和接触地带」国際ワークショップ「现代中国的人口流动与族群关系」2018年3月25日、四川大学中国藏学研究所、中国。

②金谷美和、上羽陽子、中谷文美、インド、アッサムにおける生態資源利用―「線具」を中心に、パレオアジア文化史学第3回研究大会、2017 年 5月 13 日・14日、国立民族学博物館、日本。

③新本万里子、「私たちのマーク」の生成と流通―網袋のデザインにみるパプアニューギニア・アベラム人の自己表象、日本オセアニア学会第34回研究大会、2017年3月26日、松江しんじ湖温泉すいてんかく、日本。

④Nakatani, Ayami “Conversing through Textiles: Mediation across Producing and Consuming Ends of Balinese Songket,” A Joint CASCA and IUAES Conference, 2-7 May, 2017, University of Ottawa, カナダ.

⑤Ueba, Yoko “Strategic Production in Response to Value Orientations: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat State, Western India", A Joint CASCA and IUAES Conference, 2-7 May, 2017, University of Ottawa, カナダ.

⑥Tamura, Ulara, “Local Handicrafts Culture and Market Economy:A Suggestion from a Case Study of Turkish Carpet Production”, International Symposium on Cultural Resource Studies “Design and Diversity”, 13 September, 2016, Institut Teknoloji Bandung (ITB), インドネシア.

⑦Nakatani, Ayami “Cultural Heritage as Commodity: Production and Consumption of Traditional Textiles in Indonesia,” Association of Asian Studies (AAS) in Asia, 24-27 June, 2016, Doshisha University, 日本.

⑧杉本星子「マダガスカルの養蚕―歴史的背景と現状―」第８６回日本蚕糸学会，2016 年 3 月 18 日，京都工芸繊維大学、日本.
⑨落合雪野「農業と染織ー植物から糸へ、糸から布へ」関西農業史研究会第 345 回例会、2015 年 12 月 12 日、大阪経済大学。
⑩杉本星子「サリー消費動向と手織サリー生産地」，日本南アジア学会第 28 回全国大会，2015 年 9 月 27 日、東京大学、日本.
⑪Matsui, Takeshi “Textile as an Eternal/Transformative Commodity” ICAS (International Convention of Asian Scholars) 9, 5-9 July, 2015, Adelaide Convention Centre, オーストラリア.
⑫Ueba, Yoko “Embodied Knowledge in Rabari Embroidery Patterns,” Knowledge Transfer Across Borders:Integrative Approaches, A German-Japanese Colloquium,15 January, 2015, University of Göttingen,ドイツ.
⑬金谷美和「更紗工房の歴史エスノグラフィーインド西部グジャラート州における木版の分析から」民族藝術学会第 30 回大会、2014 年 9 月 21 日、国立民族学博物館、日本.
⑭Sugimoto, Seiko “The Japan Sari,” India and Japan :Road to Modern, International Conference organized by East Asia Program,12-13 September, 2014, Institute of Chinest te Studies, Delhi, インド.
⑮Nakatani, Ayami ”Fashionalization and Heritagization of Hand-woven Textiles in Bali, Indonesia,” Roundtable:“Cloth, Culture and Development,”organized by IIAS (International Institute for Asian Studies), 24 – 25 August, 2014, Chaing Mai University, タイ.

〔図書〕（計 7 件）
①宮脇千絵『装いの民族誌―中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社、372、2017.
②中谷文美・宇田川妙子（編著）『仕事の人類学』世界思想社、307、 2016.
③上羽陽子『インド染織の現場　つくり手たちに学ぶ』臨川書店、208、 2015.
④松井健『民藝の擁護～基点としての〈柳宗悦〉』里文出版、227、 2014.
⑤落合雪野・白川千尋（編著）『ものとくらしの植物誌－東南アジア大陸部から』臨川書店、344、2014.

６．研究組織

(1)研究代表者
中谷文美（NAKATANI, Ayami）
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：90288697

(2)研究分担者
青木恵理子（AOKI, Eriko）
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号： 40180244

上羽陽子（UEBA, Yoko）
国立民族学博物館・人類文明誌研究部・准教授
研究者番号：10510406

落合雪野（OCHIAI, Yukino）
龍谷大学・農学部・教授
研究者番号：50347077

窪田幸子（KUBOTA, Sachiko）
神戸大学・国際文化学研究科・教授
研究者番号：80268507

杉本星子（SUGIMONO, Seiko）
京都文教大学・総合社会学部・教授
研究者番号：70298743

田村うらら（TAMURA, Ulara）
金沢大学・人間科学系・准教授
研究者番号：10580350

宮脇千絵（MIYAWAKI, Chie）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：30637666

(3)連携研究者
金谷美和（KANETANI, Miwa）
国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員
研究者番号：90423037

新本万里子(SHINMOTO, Mariko)
広島大学・大学院社会学研究科・研究員
研究者番号：60634219

松井建(MATSUI, Takeshi)
東京大学・東洋文化研究所・名誉教授
研究者番号：50109063